

---

# 爛華

高藤至

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

爛華

### 【コード】

N4758D

### 【作者名】

高藤至

### 【あらすじ】

『舞姫』と呼ばれた女の最期の舞は、闇夜に煌煌と咲く焰の華。

(前書き)

注：死にネタです。各自自己判断で閲覧願います。

爛華

火の手は、至るところで燻っていた。

視界は、煙で霞んで見える。

青月の宮　月に映え蒼く浮かび上がるその様を、幾多の詩人に称えられてきたこの宮殿は、今や紅蓮に染まっていた。

鼻腔を擽るのは、焼けた肉の生々しい臭いと血の錆びた臭い。それらが混じりあい、辺りに充満している。

そう　焰は、誰の前にも平等だ。

貴族であろうと、奴隷であろうと、関係ない。皆、焰に巻かれ、灰となって散りゆくのみ。

この宮殿の主とて、例外ではなかった。その名残は、玉座の上で燻っている。燃えることのない宝玉の数だけが、かつてそこにいた者の栄光を止めていた。

だが。

その宮殿の中で唯一、燃えておらぬ場所がある。

大広間の中心、石造りの舞台。

燃えゆく人柱に照らされた、その上で。

女が踊っていた。

胸当てと腰から下の薄布だけの、肌も露な純白の衣装。それが、焰に照らされ、朱に映えている。首に煌びやかな装身具を幾重にもつけ、腕には銀鈴、両手でヴェールの両端を握っていた。舞姫、と呼ばれる踊り手だ。

ヴェールが風を切り、宙を舞う。緩やかに揺らめく、灯火のように。

タンブールはすでに止んでいる。代わりに、切れ切れのうめき声が音楽を奏でていた

終末の音楽を。

不意に、女が動きを止めた。

女の視線の先には、玉座とそこに座する男の姿があった。

緋色の髪と瞳は、彼を照らす焰よりも紅く激しい。

秀でた額と高く削げた鼻梁。彼を生み出した者は、一切の妥協を許さなかったのである。髪の毛から指先に至るまで、彫像のようだ。人の持つ脆弱さや不完全さは微塵もない。

当然であろう、彼は人ではないのだから。

その事に気づいた女は、無意識に後ずさっていた。

男が口元を緩めた。  
完璧なまでの微笑　それは、美を超え、不安を掻き立てる。

「呼んだのは、お前だ」

女は呆然と首を振った。

「わたしは……私はこんな事なんて、望んでなかった！」  
「そんなことは知らぬ。お前は踊ったのだ、焰の舞を。我を呼ぶ、滅びの舞を」

男は一步一步、女に近づく。

もはや、女は逃げられなかった。天を仰ぎ、目を塞ぎ、その身を守るように肩を両手で抱き締める。唇からは、嗚呼と、震える声が漏れた。

「我らを呼びながら、お前は滅びを望んでいなかったと言う。ならば、何故だ？」

男の手が、女の腕を捉えた。

女は目を見開く。

炎を纏いながらも、驚くほど冷たい手だった。身も心も凍えてしまっただけに。

女の戸惑いを歯牙にもかけず、男は強引に女の体を引き寄せた。そして、耳元に囁く。

爛華  
「皆、滅ぼしてしまいたかったのか。お前達を蔑み、踏みにじってきたもの達を」

女は首を振る。だが、囁きは止まらぬ。

「かつて、お前を捨てた男を灰にしてしまいたかったのか」

男の視線は、女を通り越し、その後ろに注がれた。

今や灰しか残っておらぬその場所には、女の愛した人がいた。

だが、女には分かっていた。それは、愛ではなかった。少なくとも、女がその人に抱いていた愛ではなかったと。

あの人の愛は、例えば自分の所有する宝玉を愛でるような、そんな愛情。

それでも、恨んだ事はない。自分の思いが報われぬことなど、分かり切っていたから。

だから　再び、首を振った。

「ならば、何故だ？　何故、我を呼んだ？」

彼女にも分からなかった。

どうして自分はこの舞を踊ったのか。

古来より幾多の踊り手達に伝えられながら、禁忌とされてきた舞を。

その答は意識されずに、口の端に上った。

「私は、ただ燃え尽きてしまいたかっただけ」  
言葉となったことで、ようやく分かった。

「踊って、その中で燃えてしまいたかったの」

踊りは、何も持たない自分にある、唯一のもの。  
自分のこの身でさえ、自分の物ではない。心までもが、あの人の  
ものだった。

ならば。

この手にあるものが、踊りだけしかないのならば。  
その中で、燃え尽きてしまいたかった。

手が振り払われた。

男は表情を変えぬまま、言った。

「ならば、見届けてやろう。お前の舞を」





人は、業火と呼んでいた。

だが。

女の焰は、業火ではなかった。

はっ、と弾かれたように男は目を開く。

そうだ 爛華だ。

絢爛に咲き誇る、焰の華。

燃え尽きる間際の、一際激しい生命の焰が、そこにあった。

炎の華が、闇に舞う。

一際大きく揺れて

火の粉を撒き散らし、散りゆく。

火の粉が降りかかる。だが、男は振り払おうとしなかった。  
ジツと、肉の焼け焦げる臭いが、鼻を付いた。

今、自分の中にある、これは何なのか。

目の前の焰と同じく燻り始めた、この思いは。

彼は、じっと目の前の焰を見つめた。  
- - かつて女だったものが塵芥となり、風に舞うまで。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4758d/>

---

爛華

2009年3月24日10時30分発行